近世美少年錄

三編

壹

へ13
3567
11

門へ13
號3567
巻11

曲亭翁口授編

近世說美少年錄 五冊

一陽齋豐國畫

文榮堂
群玉堂 精刊

早稲田大學図書館
昭34.6.3 受
藏書

昌平坂學問所

訝之採珠者懼爲人所奪遂劈股以藏珠焉是非不愛其股爲利珠已由此觀之惑利則忘愛是以有售其子者溺愛則忘訓是故兒孫匱孝悌名之爲迷懞世間有此病何以治之言有一方無如稗史小說也蓋稗官架空之談妙示勸懲而不迂藹人里耳罔所忤風俗澆漓厭常耳食新奇因其勢以奬導之乃效驗非淺尠也唐許渾宗嘗以醫爲意稗亦出於意匠而有巧有拙拙則亡論巧者多隱微知者不易矣其知與不知吾惡揵念是書復續稾至第三輯刪人告成之日聊亦題于簡端

天保二年如月中澣

曲亭蟫史撰

近世説美少年録第二輯總目録

壹卷

第廿一回 飛猟筍晴賢拯麗人 追妖獸直行遭少年
第廿二回 上市御斧柄倡恩人 感奇偶落葉妻姪女

貳卷

第廿三回 知母補益奬遠志 車前論效留當歸
第廿四回 直行惡方恣加減 晴賢聽訟順政知賊情 竈窟竈多金落葉遣女壻
第廿五回 陳嬋落葉乞恩赦

三卷

第廿六回 索唐布晴賢遇義弟

四卷

第廿七回 示仙術舌創哄騙 戍丹州福富添指
第廿八回 詰茹有驗觀破爐 耽欲大夫次亡家

五卷

第廿九回 遺諫景市走西都 分壁黄金舜東行
第三十回 關關雎鳩荷三太逐客 宿妓樓朱之介値禍

第二輯目録終 第一回至第二十回目録見第一第二両輯簡端

賢如孟母才似柳嬢
断機厳訓和熊宜嘗
教居辞客進退有方
仗義應報舊縁弗忘
離離落葉歴幾風霜
化入仙境遺徳流芳

賛義姑落葉

上市の落葉

安倍の筋五郎直行

像賛第十三

有験観
吾命道人
伎倆
騙術
眩惑彼愚
以慾倡慾計在丹爐
妖面資惡蛾之與狐
黄白傾竭富翁得章
任俠不識餘孽雖紅
竊鮮行裏善救末朱
十三屋
九四郎
像賢第十五

有験観
小槌
伊勢はなれたる世
京紀文盛の所乃
ゆのふ仕ふる武
於義者一孤少主
雕富
児
髪
打出
像賢第十六

文淵堂藏

作者云草紙物語を批評するの猶五味を嘗るが如し甘を好む者辛を嫌ひ酸を嗜む者苦と鹹とを妙とせざる好憎あり隨るるとも作者の隠微を亮察して深く骨髄に入るべし稀代の奇勢坂の樂亭氏は素より稗史のオあり其の著述所あるを世に知られる乃者桜亭郵書中の美少年録一二の編輯を批評して予が其の意を問けるとうらくと閲せしに五味みなうち味ひて好憎偏らずして深く作者の肺肝を探り隠微を発明せしエヨクロ実に才子のうぎわを操遣措いさぎを彼金瑞が水滸伝の外書に倣へるあるべし録して見せよ好る君子に知音のあるべし

○琴魚云美少年録第一輯の発端大内義興の阿蘇山攻に開戰の光景を書あらいさぎよし七沼の出水を堺をあけて地中より火を発して奏く落城をうけられしに初よりして看官の倦げなる為に趣向を建る省筆なるべしてその水火を恐れる大得を恐嚇せしめ劫を出れども火と地雷と分鮮せざる阿蘇の大宮司が義興を慰る段に六の山の燃る往古より一所に和ぎ云云とかせ君が刃に血ぬる云云とかせい淡くるやうく書倣した所そが中に毋貫目の心をうけとり看へ紀所を大約に一回に水火既濟の象あり既濟は支既に成就せるなれども又散乱する迷ふ譬に大内氏の富貴なる義興の時に極りは既濟の象をかくてその嗣義隆に至て遂に滅亡せるは故に君子は既濟の時に方て後の憂患に慎むとこれを稱へり又既濟は火上に水あり水火相交りてその形を成しその用を通ずるなれば後に悪少年の生出ると美少年の世に顕るる大意を窺ひ示されしに水火の熟に前伏あり恐入る神機妙算凡作の及ぶ所にあらず又弘元が辨才天を深信して義興を諫める出水に推流され一時もの神を祈念せしその信心よく融まりかくて素戔嗚の近の段に至りてその情状をあらはし終始味ひあり又出水の光景を書つられ所川下は只水の濁るのみにあらずして実景の一時の洪水その枝川まで目撃せしとあるとこそ感深う又素戔嗚六夫婦の弘元を曾待の段に雑魚に塩を云云より野を摘のあり物云云とのべるまで今はそれは錦心繍口まことにあるべしやて素戔嗚六ぐ吉嘉吉応仁の乱基を論ずる段に男色の害ふりてその世の乱れしを説諦されしに

條々みな金玉の言葉その段の頭書ゆゑ一部の要領この中に篇目の説
治て意味深長なり市川角頭太が鳥銃を引提て出さる看官胆に浸せ奇妙趣
向なるべし又義貞の蛇穴を焼く段も骨竦然として夏なれども寒し無慙なるかな
大蛇焼爛れて死する景迹実に恐を逸するに足れり全く作者の書ざるまま
の八犬伝に伏姫自殺の段とこの段とは水滸伝の発端一百八の魔君を走せ趣向よ
出来たりとはいへども皆換骨奪胎の段なりとその趣同じからざる義貞が
弘元の諫を怒りて害せんとせしも蛇怪の一事に出でしなり弘元を賞美の段人情
宜しく然るべしとなり。愈くその人がらを瞭然として苗野の辻堂
に避迫する段は上の時代物語と。忽地に機の変る処亦一奇なり瀬十郎が
近ごろ東国に持資入道の云云なるべし亦看官心を留る作者の
用心なりその時瀬十郎が兩衣木屐あり阿夏がそを阿夏の跣足なるを
見よと出てもろく身栄なるべし。瀬十郎が借物の足駄を阿夏に貸て穿せるべ瀬十郎が

足の遣り所なるべしこれも難義の場なるを幸に辻堂の隅に女の遺足駄あるを折
介がそれを出せしは妙の又妙なり。なほ用られるかと阿夏瀬十郎が相合傘の段む物文
人有てうちかたらひ形勢この巻中に出顕して動くが如しそが中に路地の地名とえまり
ぬく処あれども。瀬十郎二階から陟りてそこらをめぐりて形勢も真に逼りくる。柱にかけたる
桜の花笠牡丹の扇竹笠三絃胡弓あるをそこの人がらを猜るに亦妙なり且折介を且く遠
離たる。女あるとの甚酌目前の如しそれば又木偶介に阿夏をかろ迷ひて遂にその産を破
ずしより阿夏が恩義の枷を被られ已にそが涙を入贅をされども奴僕のごとく使ひ
生活の秋物をかち運せ客稀なるも憂とせざるべしこれ今の比類なきなり
あるべしその情態寫しがたく妙なり又阿夏が。瀬十郎の送扇の歌とえる段に斑女の故事を語
曲がりくねり判断せしもその人柄のあらはれたるなり。叔又嵯峨の山荘縁起共の真跡に寄せ心よ
ばべくその山荘にあるべしこれ蛇孽の胎ふくめりとある頭書をして誰もあるべけれどその一
段の初中後にかけて感ずべきなり。両郷にもあるべし殿下の御館に赴きひて阿夏

瀬十郎が再會とする処艶ふして且因果をひさぐ。勸懲の意も笹竜りたり。白蛇れ阿夏が要ふ寅縁て。肌膚と舐る光景いかとぶ。しくも亦のやらく。瀬十郎ふ氣絶さそ白蛇の往方を隠したる。意味淡くぎさそ第六回ふ瀬十郎い衍恐あるく。周防へ返さそ段ふ兄四郎を遣しと。竊ふ消息を贈らせるひ。兼顕卿の人ぐら。実ふ粋なる搢紳家れん。ちくしふ合はうもあれい。一入感ふ兄所へなの深草の段ハ水滸なる。林冲ふ滄州へ配流ふとれそ。その妻と訣別ちる。趣とを支かいとく。密ふ刎ぶ。情人の哀別ぶが。情態又憐むべ。就中稚児のふふ一文字の入やらうて。再會の割符ふせ。い新奇ふ。かくて磨鉞峠の段ふ至りく。阿夏ふ重々の厄を被らぞ。密ふ入せ。と後悔さそ。看官ふあれぐ。せ。作者の用心專文の場と又阿夏が神僧ふ漕段。往支と説て後来を示さぞ。只その密所阿の解んとを諭したる妙。そを又阿夏が夢ふ轉と。ひとり抱を。ふれ黒茶ぶが深ふ吊をれる毒石の落るとふ。毒殺と思ひつ。自然のと。看官ふ必ず二賊と毒酒のと殺さるんとあるふと又一轉して相殺るふさそる趣向ふ精妙。そのれ

珠之介ひとり。二賊の枉死もとく駭とりて。又とり揚て佶とうるとり初て珠之介の清と。そられそのこ乳質もこの時より露れる。やくて阿夏が過来ひこの物語の段ふ。偶介ばふ。瀬十郎のふ支説示しと。自殺せんとせと。珠之介ふ諫られ又瀬十郎ふ。ふく思ふ意を内ふ含ふく自刃とふひとぎりふ。自然のと。ようや浮落の淫婦へも死ふ。せ。人心の禽獣ふ異ふ所穿ふと哀れ。ひくて二賊の亡骸を埋んとふひ。婦人の情ふ。亦鳥獣ふ異ふれ。然ると珠之介ふ。そのの亡骸の片つけをとを夫とあらふ。ふ。銭三文ばかり遺しと。生涯の損とそ。母ふ孝とつけさそ。夏より先ふも納戸ふ寝ちて熟睡ちる為体。自然ふあらて悪少年の乳質ふ精細ふ寫されふ。妙絶とふべ。かく。阿夏母子ぶ山と生る段ふ緑毘亭のふと思ひ。又その山路の光景と寫される中ふ。蔓延とする枯藤の猿ふ。ふ。蟻の紐ふ似うとふ。妙文あり。その句ふ特ふ深山中の。遠景究も石ふ面ふ異る。ぶ。ふて細谷川の流ふ馬と失ひ。この処の路を影路書ふ。金銀と失せるふ。妙智力とふべ。草舎ふ猿と喪ふ谷川ふ馬と流。意馬心猿し狂

態を推鎮めしより。尼難を救ふもあり。作者廿の善巧方便たらんも尾もあり
ある。神出鬼没の手段なかくて又礼畑の三池村に母子宿を投て五色の玉の出処をしらせき。
それをよそがに福富に至る段初輯巻末の繍像を見れば又後輯を俟るゝ大丈次が物かたり
ひみ蛇腹の中よりして五色の玉をえてしとの又阿鍵が臨月その期に過ぎて十二ヶ月にて蛇
退皮を煎じ飲しく黄金を産ことあるも八犬伝の玉の出処と前後しく似ることあり。
大く趣をかへられし自由自在の筆なる。但大夫五が休書を送し亡命せしといふ一條
のみいう形る故欲とひろぐて抑この公羽は年中の著書十数部皆俗にいまだ尾け書にしく。
一たびも創稿を易えあらたと傳へざる余らがのやにても類なるものなく後の世にも有かき
かくん然るをおのれ琴魚ぬるが叨に筆を走しく評するは嗚呼がましく打出の杭は似され
どもかくまで心をつけて熟読熟思せしよしを告まつるは拙評の當不當を問ん為にもありける。
右櫟亭氏の批評は第二輯の評もあれど毎巻楮数に定限あれば是も六の巻に附録まで
その異日第四輯を著さん折又简端に附まいらする評中なる水火既済と意馬心猿は特にめでたし。

近世説美少年録第三輯巻之一

東都　曲亭主人編次

第二十一回　獵箭を飛して晴賢麗人を救ふ　妖獣を追ふて直行少年に遭ふ

再説末朱之介晴賢は。獵にいでたる鷹獲山に暁る天を俟つ石室の内より出て岡の
邊なる樹間に隠れ弓箭を剣ひてかまへて物の近づくを見く其処に張よする折から皆暗の天
霽て玉兎鮮明なる深山路に叫ぶ女子の聲喧しく這裡を投て伴るを但見れば二八
可なる最美しき女子なるを見て來ぬる物ありけり。その容貌宛猕猴に似て身長五尺
許なる四尺あまりなるは妖怪か比彼佳の面貌は頭は眞白に長毛の途を蓬して背に
垂れし人欤とみれば人にあらず獣に類して獣に異なる這物們が件の女の髪を捉へ
足を拘へて東に吊のくねて來る。たゞ石室の裡面に卸して何言やらん罵りと相罵

飛を喚出されば妖ハ身をもちかへて究めて倚るを寄せじと角へども鷹に捉れし緑鳥の者羽
くしても甲斐なければ怪物們ハ嘻々と嗤ひて仰ざまに推倒し一箇ハ頭の方に跪居て左
右の手を捉扼て老大なるハ前より進よりて妖の裳を推披ければ毛臑を露して且犯さん
とせし処に朱之介ハ看済して克弩固めて弾と射る矢坪違はず老大なる那怪物が背
より胸前までも射徹して深窮所の深痍に耐ざる時もうち堪ずぞ苦と叫て仰反ぞのけぞり。
称え捕笠前の衛音を頭邊に居たりし怪物ハ驚怕れて妖を捨て走りて洞口を出んとせし
程もあらせず朱之介が發つ二の箭に是も亦吭へ比深く射串れて叫びも果ず仆れけり。
登時朱之介ハ弓を莫哩と投捨て要剣を抜放ち引提て洞門に走つゞき射て仆
したる怪物を是彼共に十々滅を刺して拭ふて血刀を腰に歛め件の妖を勤らんとぞ。
はし入れば月は燭に立よりてよくよく見るにぞ妖ハ歯を切り眼を閉て氣息も且今是を
救ける亦ハ龍を屠て珠を採らばる島許人に似るべしと獨語て遠して腰に吊たる

茶篭椨枝気後男黙契

茶篭より茶を取出して歯推を以て妖を抱起して口に附る椨枝もて歯を推開き
吹入れて呼んと耳に名を知ざればあや喃々とぞ頻に呼活るに半晌ばかりその声
總に耳に入りけん妖ハ些ばかり蘇生りて手足を縮め眼を闔て朱之介をよくよくも
視て吐嗟と叫ぶ声と共に抱れし手を振放ちて膝の上より轆落て戦慄ながら逃んと
せしを朱之介ハ含笑ながら臂を伸して曳留め婦人なにとて怕れるぞ俺ハ是変化に
あらず今宵ここに宿して汝等の與に這妖怪ちを射て殺したるものなるぞ且よく
あれを見よやと指さす両個の尸骸を妖ハ見てもおそろしく左さま右さまにくりかへし
朱之介をつくづくとうち見て胸を拊下し原来おん身ハ妾が與に這禍鬼を攘せ給ひし恩
人にて渡しませし。まことよる伴ども倶せずしてただひとり深山に宿しあるべき故ぞあるらんぞと訪問
るに朱之介あなたハ知れぬ情由なれば俺ハ恁々そとて且姓名を告知らし君命によりて
東国よりはるばる来て六田の旅亭に人を俟ちて日を弥る徒然に堪ざりけるがけふも

あるに獵くらし獲物を貪り路に迷ふて従僕等に後れしがせん術なくまた石室に夜を明
るを俟るに仰ぐ身は何処の人かく這怪物なるに捉られしが向ひされにけれかぐに妾その
山の麓よりの程遠からぬ上市の御に世を渡る杣木の落葉が女にて斧柄と喚ばれ侍る
なる孀婦主人にあれれ家則の厳しき随より外に出されねば漫行もせしこの[illegible]
母の艱難あり甲夜より母親共侶に夜中の比まで綿を摘く臥房に入りて睡りしに忍地に親の
外に出て[illegible]聲に呼起すの声睡耳に入りしかバこれ皆あるさ應ぞへて遽しく起出ぞ
門の戸を颯と推開けバ親にもあらで怖ろしげなる非常の物が右左より妾を挟と攫抓
らく宙に吊して走るになん身は妖怪に捉られけりと初く暁得れど其の甲斐なくより
外に去ざるる這山中まで扛て来られて命も既に危うかりしをそなた刀禰に救れし嶺上の
松より弥高き現再生の大恩を暁るまで程もあるべし家路に送りたまつらバ親も歓び
この身の幸ひ何のこれに優ものあらんと憐愍を他事もなく憑む言葉の露

よりも脆き袖の涙く長き夜なれば深山の奥も明るにま先扶掖まむ
らるぐ朱之介は山を下らんとて斧柄を後に立しめ出て捨る弓箭をとり揚げ路を徴
めく山脚の方へ赴んとする程に遥に[illegible]の鉦鼓の音聾して銃を携へ其人許多
蕉火を振照らし諸声合してやよ斧柄斧柄と斧柄よ何方ぞと呼声漸々に近つきて這裡を
望く来にけれバ斧柄はやうやく朱之介も彼は正しく里人們が迹を慕ふて来ぬらんぞと
思へバ駆く走り對ふて応唯々と答へつゝ手を鳴らしつゝ抗く只管に指招くを山
挾皓く来る随にちらちらと鉄炮の里の衆人原来て斧柄は恙なく那首に居ると散動
めきてるに其中に一個の武士年齢は二十許なるがそれや先立て近つき来る朱之介がら
と箭を挾みると佶と見て小松を肩に向ふて寄らざ忽地に声をかけて斧柄に倶
なく咱們を招きしは什麼何人ぞと問たて朱之介は些も擬議せず俺は東國の
ものなるが六田に久しく旅宿をするれバ徒然に勝ずしてきのふ這山に獵くらし路に迷ふて

せん術をさゝ那裡の岩室に坐を占く。ひと天の明るを俟程に不憶も這婦女子れ。妖怪に扛攫れくゝて来られしを過しぐて。猟箭を飛しとその妖怪を三頭まで射く殺しぬ。俺氏は末名は晴賢字を朱之介と呼るゝ和殿は亦是いかゝる人ぞと問ゝ吉きく件の武士は怯る色なく小賈を折めく。在下はその女子と同郷の浪糧人なり。武藝は家業なりとも田舎に要なる技なれば帝算筆を人に誨く。練は日喜春に給しる。安保筑前五郎直行と呼るゝのみは昨夕小夜深し比それなる斧柄ゆゑ物に喚起されけん慌忙しく立出く颯と推開く門の戸音に母親は睡覚て驚きあやまるを追懸く中ゞ何地行けんとてそれば原来妖怪に喚出されくるぞ由を聞しあんぢらんと心つきる老女の推量四隣の門をうち敲き里人ゝを喚起しとりを告救ひを求る吉急るれば要時も猶豫せず且聚合しの十人有餘咸速に准備を表。何処を投く追索んとそ相談きるとき故老のゝ言う這首は山履きまこと妖怪山

魅に少女子の捉きとの稀にあり。落葉の刀身の今愛も山魅に捉きしの出やあえ。表くゝば里を渉猟んとう。鷹鳥捉山に分け入りくゝ索ひと誨るに食ろゝを異淺もく。這山に来く渉猟ゝ甲斐なく斧柄に遭ゝのこるを圖らぬ所の救ひをうく那妖怪を退治せられその身に恙なきを喜い有ゝ。ゝ老老ゝ和殿の賞美に分に過ぎる。辞今ゝに及び各位に意せるゝ俺の弓箭の故ゝん誘々とのひくも弓箭を捨る怜利に箭五郎も里人ゝ感嘆しく食共侶に斧柄ゝ身退にうち聚ひく且恙なく歓びを述く朱之介ゝ箭の修煉を且感に且謝しく。扨石室の退に赴ぎ那妖怪の死しを見彼俱ゝつゝと舌の舌を巻ぬるく駭嘆に相顧くゝ疑くもあるゝ山猿にそあらんぢらん。とのゝ一人進よりく左に右見ゝ退ぎく箭五郎斧柄ゝに吾侑は仙木を椎ぎとりく。山に日を歴るゝもあれば這山猿を見知りく仙人の山を出ぎて木を伐るゝのあり折ぬ。

板屋に昔く起臥せるに寒けき冬の夜なれば、這山樵ゞ突然と来りて地炉の火に當るを人食熟く駭怕れど渠ゞ隨意に煖られれば渠も亦言葉なきまで默然として曉方に出でぬ。ぬくのぞ。けだし谷の人、竟に折れ或は樵夫の割竜を竊み衣物をも竊去りく被も一咲ひもまとあり。嘗に好きく谷川に蝦を捕咲へるを嬉るるとも大なる。なるまでの高老を歴しの人里の婦女子と扛攫ひく犯く後にその血を吸ふと藻くゞ咲に果しく差ゞまで最憎むべきのみにとの領く箭五郎の衆人とともに這山孫の亡骸を里人寄のくもうんに要る。然れば、とくまの伏ふうち葉措くも快うまで。たゞのの両三名迷ひ留まく火をかけの又壮佼達一両名は先へ走りく落葉の力ト自ふ。その為体を報知らねとくくとのそゞ立く又朱之丞ふうち對ひく。思ふく斧柄と垂異まで出でまと親の族びいべちと咱仂まで面と起せ幸ひでいべいらで是より上市る。宿所ふ零時立ちくく渠ゞ親ゆる對面まで勿論田舎のゆりまで

是より先は巡嶋記に猶ゞあり又八代ふ山猫あるを至て之びゝ上皆間作者の一筆に出るあれども之の趣味べー

ちせる御食応をるうゝ。さて辱くもそれ六田の逗留まるゞ吸の序次も有りゞ枉てその詳どうけ引く。彼首で休息しのひ私とふと然るりと衆人も誘引立く已ざられば朱之丞は推辞ふく遂ふその意に任せて。ゆくびら前を推乃へそゞ伏斧柄と共侶ふ前五郎仂ふ御導をせられて上市ふ赴く程ふ午の見吹く比及ふ杣木の落葉ゞ宿所ふ来ふけり。却説這上市ふ落垂と吸る光女あり。原是主人の女弟之十稔ふまる前ゞ比家あるゞ時疫ゆゝ。夫婦ふち續ふく身まるゞ家ふ一個の女児あり是則斧柄ゞ引ふ憑ふ親族るければ斧柄ゞ成長るまでとく後見とく繰遠ふ世帯車ふ筥隻繰の。さて光陰と織紬ぐ世渡る業ふ暇るゞ嬬あるゞでありければ婢妾一両名使ふのゞ先代よりの田園ふ人を傭ゆく畊さ富むゆもあるゞ貧くもあるゞ驕る山里ふ足ることを知る衣食住三四五才の比よりゞ幼稚ゞ姪ゞ護艱ひく今茲二八ゞ良壻ゞとゞ擇めゞ。さるふ慨ふのるければ原の伏ゆく在明の月光冴ゆる冬の夜ふ

斧柄を拯ふ朱之丈箭五郎
朱之丈
斧柄

箭五郎
出像第十七

斧柄は山魅に捉られつゝ臥房に在るぞなりしが。落葉は大く駭患ひて時を移さず里人に告知せ迹を追して出し遣りても心は放ちるぞのかくと思ひをびて目睡もせで天は明ぬ。日は升まども便宜も聞えざりければ心を苦しめて立盡しゝ門の杉日影も真直になりし比里の壮佼一両名鷹捉山より帰り来て斧柄は恙なかりし。朱之介が山猱を三頭すぐ退治して斧柄を拯ひし。縡の趣箇様々々と落葉に報て。今弱は今衆人倶せ。我々くりの衆人咱們は這吉左右を。おん身に疾く知せよと箭五郎ぬしの名れしぞ先さきく走りて来つるぞといふに落葉は憂をとりし胸の日影の霜とちち解けて天に歓び地に喜び且壮佼們に茶を着め酒を喫して叮寧に労ひて。又遣し猛に婢妾們を呼立て投衆人を管待の准備に暇なかりけり。有恁程に安保箭五郎は里人們と共に。倶に斧柄を伴ひ朱之介を誘引て齊一帰来りければ落葉は笑て出迎て。かの病坊の師匠なる箭五郎をいふ。みなさまも御劬労なりけん。寔に斧柄は命めでたくある人さまに拯れて妖怪をきえ

退治せられし。その縡の崖略は郷閭に壮佼達のもち来ぬ。かくて来まして報られしが只病の痞の痊て歓び給ひ。斧柄はさてもおそろしくも哀しくもあつかふに吾儕も今朝まで立明しくらし歎きてのみありしぞといふ間に箭五郎は斧柄と母屋に推伐めて階框よりと掛て喃家々さん嗚呼びまいらせしも摠名代に且寿きまゐらせ。女兒恙もなくて了みひ。今愛女の身を離しく常閭なりし。一般戸より天の明初し心地すなる。衆人皆歓びまいらすると。いふで。後方をみ返りて。やよ家々さんは那方さんは鷹捉山にて大小両隻の山猱を射て捕て斧柄どのを拯ひぬ。恩人ではぞいぬる。比東国より来まして六田の客店に逗留の徒然に。鷹んとて山猟して路に迷ふて日をくらし山路に露宿まで。その折のなりとて山中の旅亭に還んと宣はせしを推留めて。おん身に逢しまらんために誘ひ立て来つるなり。おん管待もありぬべし。且歓びをまうし給へと辞せてく會釋をつて引返れば朱之介は微笑ながら落葉に對ひて名告をして初對面に落葉は額さへ手を衝て先ひろけ

元恩人なる吾侭に斧柄が艱苦に待り。小娘の與へ命の親とまうさんもかたじけなき
ある山路の客子も客まほし。且も奥へ入せ給へ。斧柄に乞く客房なる表席をみる推
巻除ことく掃浄めく賓客なると案内して茶を進らせよとくくせまとのたまへ又衆
人おうち對して各々さるゐも欽びの竹葉一盞まわらせんとのべ衆皆頭を掉りく不咱
们八土足ゐ。尚曳送せ。諸葛菜もあり。乾さびるゐ鰥もあり。葛も蕨も曝さ
ればるゐ小春のけの日和を工夫に銷さびるゐ。せんたの随放遣くるゐ。醸酒の御
馳走とる。迫に愛元管待へ暇まうけと貪ひ捨さ已が隨ゐる田舎児の林忘とも
留らず動揺々々と脊一出く出ゐ。笛五郎も且宿所に退りく。めへりしうを妻に告
出ゐ。く来へべ。とのを沿菩提寺と推当へ。と後世に契
ゐく遽しに病坊の宿へ。けり登時落葉に斧柄と倶に朱之丞に案内を告
客房の上坐に推居く茶を看め豫く准備の酒肴殽も種々とり添く欽びを

述恩義に感ずく最叮嚀に歓待する人の誠に朱之丞に辞び難く本を受巡る
しに譚ひける當下落葉に勝を找めく。刀祢に乞年も二十のうへをまこ踊ゐ。と
乞えぬに。ゐ。ゐる故のそうまく。東國よりそるく。旅宿をて六田の御に久く逗留
去ぬるゐらん。ゐ。後者に。ゐ。と問れて朱之丞に隠ゐよるく不合後者の両人あり。一
個に猟に。ゐく。ゐ。渠に後れて陟も来ず果に麓に俟不樂。昨夕旅亭に還り
欽今朝に復那山に。ゐ。来けんも知ぬべくゐ。然ども俺身に。ゐ在れば今ぞ遭ゐ
たり。又某が稍久く六田に旅亭に日を累るに主君の仰を稟ずるに六田川のるゐ
ゐ。如来禅師を訪ん為に。ゐ。ゐに禅師に。ゐ。に帰庵に遷くとも對
面をせで東國へ還るゐ。ゐ。ゐ意味あるとそ。その故に箇様々々とのべ件の禅師に請
ふく勝軍地蔵一百體を造りまうんとある主君の青頼許多の沙金白布を賜
ーまる綜の趣その韓櫃を舁ーる夫役们に皆願ひのまゐく。武蔵へ発せ。情由

まで酒がのいまる自家晤譚ハ落葉ハ耳を側そく如々来ニ面のるもも吾侑も
豫く人伝ハ伝ふ伝ふ此の伝ふとも過世の罪障深ク所由ハ法顔と拜ス伝ふ誠ニ
障りあるかハ百遍歩ン運ぶとも避て對面ハ出ぬと噂ハ聞ども早
ハ名されぬ以ある上欲心の上ハ一ひとうちつけ形る言ぶ御主君さまハ東國ハ誰ニ
ハそまり由ハそらん願ハいろん身の上ハ姓名とも今一遍聞まほし郷ハ名告ら世ハ折襲
人達の訛声ハ匂ひ引れて沿ひとり伝ふ世六里の旅亭ハ在さえとり役者達を召取長く
ハ這出ぬ斧柄ぶうけ一再生の恩ニ必ず世ハ憑ニ情由ありとも吾
侑母子の外ハ人ハ詳ハ示ハ知られく朱之次ハ必ずハ現ニ母子ハ恩義深
く感ぜるハ知れ主君の御名もつぶうも告知らるとも害あらじと深念ニて微笑て問
侑ハ趣ニの意ニ沿ふ寡君の姓氏を訪さやハ敵國ハ憚る故のニ答られその性正
者ハ懇意ハ顧て東國ハ詳ハ説示さんその換ハ俺も亦問まく不ハ知とそれ。

女あるとでハ答まるハ前五郎ぬハ伝ふれども故とよくも知らぬ。ハ年来入贅ハ
せぬ人今愛ハ壻とも常ニ低廣ハ家の内ハ一個の僕とも使ふとく何を生
活ハ志ハ伝ふ仁兵第一の不審人の世帯を馴々ハく問ハ要ハ所ハ一樹の
蔭ハ宿れるも一河の流を汲むとも皆是他生ハ縁とハ今より七親族の思ひ
ハとあるのハ疑ひを釋さぬと他事ハ問れく涙含む落葉ハ瞼を
ハく疑ひ理ハ舊主人ハ五吾侑の兄ハ杜木斧七と喚れる地方ハ由緒ハ農家
ハ二十稔ハ前つ比五吾侑ハ幸ハく嫡家を離れて兄許寓居ハ伝ふ兄斧七も
嫂も有一歳大く流行る時疫ハく身まるハ迹ハ消ハ仙ハ是ハの斧柄のハ
ハく外ハ親ハ族ハ吾侑ハ浮世を親ハ
沿遂ハ見嫂の稚児をハ送ハ措て黄泉の客とハ恩義の枷を被らまく。
ハの家を成て伝れども入贅ハ人ハ願ハ所ハ孤ハ斧柄とハ成長ハ。

文溪堂藏

良聟索てはなくて我が願ひの如く世を捨ばやと思へばなる歳月を送るに就て家の内に男
たらんもの一個も在せざれば斧柄が親の遺しゝ田園は総て人を傭ひて耕さしむ所得十分
なれども亦煩しからずもあらず只旦暮に綿を摘ぎ又糸を繰り布を織て被も售りて
けふをすぐる饑ず凍ず世を渡るは親と兄との遺徳也吾儕が苦心も斧柄とらが家兄の
像見ぬれば現任せぬは浮世に得る涙も生ら屋く身材を伸ぐ生ほつく比なれ去歳の
春より彼此人に誂で聟を徴れども片山里の悲しさは意に擇ぶ律すけくなれば思ふを
出ぬ人なし然なれど目肩ずまりくて鳥許なるものと察くるが先祖は南朝の忠臣と称へたる
越智殿の家臣なりけり家の口碑に得へしを子孫民間に降りても世を累ねて家風を
喪ひ賤男児は絶果て女の子ひとりになりぬとも菽麦も辨ざる田夫野人の筋
なきものを聟にせんは先人に負れぬ所なれば年来一僕をも使はね孀なりとも用心せぬ
斧柄が與りも豫より注連を引けばかかる意を用ひ得るを人は笑ふ人情に疎きを

さどのへるをのさ現任せぬは浮世に得るあんな身が那如々来る帰菴を侯つびもなるも吾
儕が聟を徴め難るも今生の後世の與の所願は同じくてねども随ふねばそれぞも思ひ身を
摘てそ又人の痛きを察しけるなれとて目を押拭ふ過来しかたの物をらずを側ぽて涙含む
斧柄が歎きの霧よりも外の時間は醉醒く心裏恥らへた朱之介はそれもくとぞそりに猛
貌を更めく女あるドと見貶せし似非尊大なる容態を今はなら悔しくもひけり。

第二十二回

上市御に斧柄恩人を倡ふ
奇偶を感じて落葉姪女を妻す

且しく朱之介は膝うち鳴らし感嘆しくしふは優る刀自の用心男魂微り女ぞ豈
よくあらに至らんや尚弱冠なる某なれど為の後学になりまよく所願は時あ
ぞく成就するものなれば終に良聟どのを得たまひのかぎり基も亦余なり禅師に對面を
るまでは此の地を去らず侯んと欲す刀自は才女にさはべれ俺主君をも精

ふく當あとゝ子と落葉ハ皆あぢそる宜いまるとゝ見ハ山外の片山里より他ハ得
あら泉女の身わく廣沢東の武家さるぐ具ふまるよ伯らんや益るとゝ笑へ朱之
ゆ赤ら笑ひて扇を颯と推披ぬ刀自且これをうめ〳〵俺主君ハ便見るゝ
ゆまぐ悟られぬ。とゝられて落葉ハ頭を傾け原来ハ御主君さゆハ関東の管領
とそゝらの人も常ふ扇谷の殿ゝぬ。と問れて頷く朱之ハ扇を置こゝ戴ぬ
宣ふ推量せられ如く俺ハ扇谷修理大夫朝臣の家臣ゆくゆまぐ物數ゝね
ども末朱之ハ晴賢と召るゝのでハ俺名ハ向ゆも名生りあぬとく記憶しくゆひ給と
ハ落葉ハ朱之ハとつらくとち目成ぬとく。ハ身の語音ハ素より此
東人と嗜ゝぬ伯ら今より七八年前ハ比大内殿の御内ゆも陶氏の刀祢とゝまく左衛の
城主るけゝ。と這里ゆ伯ゝ伯らくゝ。そゞ氏族ゆゝとゝさぬゝと問ゝく驚く朱之ハ答
ゆひ〳〵と嗜ぬ紛らゝ然らぬさるゆゝて不陶氏ゆ叔父ハゆれども俺ゝゝハゝゆめ陶ゆゆゝて

本末の末とゆ字を書る原ハ末松氏ゝ〳〵故ゆく末松の松を省ぬく末とぞゆ
る周防の陶ゆゆ〳〵とゝゆゝを落葉ハ皆ゆ外ゆくゝの末松と唱ゆ地名ハ伊勢州ゆ安
濃の津ゆ程遠ゝ内村ゆ伯らゆ。ゆゝゆより那津の町ゆ近比まで末松屋木偶ハと唱れ
る。商賈の伯らゆ後ゆゝの家衰果て京ゆ陟ゝく借屋ゆゝと口ハ人偶ゆ伯ゝるの三ゆ
後のゆゆゝ〳〵伯ら原来ゆ身の此先祖さるゆ末松村より出ゆ秋同苗字の世間ゆヨく
ゆゝ〳〵該ゝゝら末松ゝゝらゝの外ゆハゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵と真実ゝゝ根究り
無ゝを欲ゝ問れゝる言葉ゝの末ゆ枝指ゝく花ゝゝゆゆゆ朱之ハ安貴のゆる暗譚の奥ゆ果
ゝく更ゆ又深念ゆ及ぬ感嘆ゝゝ膝ゝゝ鳴ゝゝ奇ゝるゆゆ奇ゝけりゝゝゝて知ら
ぬけん那木偶ハ俺親ゝとゝゆゝ諦ゝゝゆ身の素生ゝ落葉ハゝゝ伯ゝゝ原来
ゆ身ハ木偶ハゝゝ笠屋阿夏ゆ生ゝる男児ゝゝゝゝゝ氏ゝ育ゝと俗ゆゆ人ゆ提
ゝゝゝ身の射藝三下ゆ足ゝゝ小腕ゝゝ妖獣二隻射ゝ殺され魂胆の逞ゝゆゝを

然ば親に似ざりけり。宜なる過世の福ありけん、東国は武家のよろしき中に特すぐれし管
領家扇谷の御内人と成登て、さありしも然ありけるに、とにかくに一親達は恙もなく俱に武
蔵にいまする歟。腹こそ異なれわが身の姉なる乙柚は、いかになりけんしのとあり知らせてよとのぞ
がしそこく伯母親の辞の間に今こそ知る斧柄も膝を推挫めく目ぞ噂に皆える安濃
津の叔母夫の子でもあらば縁は絶ても刈稲の迹の鳥け声悄なく心地ぞする奴が與也は
従父姉妹なる乙柚さへ恙もなきや。ゆかしき者も皆まれり。今の容子も知しもとと親子右より
ひだりより倶にせうしく問詰らで情由はしらねど恥かしき顔に秋楓の朱え、駒馬を及
坂口の過悶ド果る頭を擡て且右をみ左をみ思ひなやみて歎息して、ためらひぬる今さ
らに亦何すら隠すべき。親にはなるゝともなけれど、わが身母子は親類故由縁ある人欲なきね
ども目今乙柚と同居ては、俺姉小百合の名あるべし。俺から言を尽さんは面正しくもなかれども
が既にお身家に知られる親木偶然は咲めほぶ華の洛陽に住居びけん俺身絶に

三才なりし。此東国にありて、挿しく姉とうぶ身を携て、母共倶に起行る程に、ぬ
日もあしき禍鬼におそはれて磨鉄の山路踰ゆく折ぞとよ、星燃やし弓の山豪ども
與ふうとて家父は命を隕せしと、其折に亦俺姉も那山豪に掠められて千仞の谷に
陷らき骸も留めざりしより、へつが身九才なりし時初て母まで逢ひにける是よりしく後
母親は憂る中三十すぎ鏡家も定めず鈴蝌ひとつ或は人に身を寓せて十稔あまりを
送りつ。舊識人に誘引れて、陸奥へとく赴る程に、後音耗絶えねば、紈袴に休
暇るそのとき安否も訪ざりしに、有恁而俺身は由なき事で或人に紹介せられ遠く
武蔵へ赴きて、扇谷家に仕ることも三四年に過ざれども、殊に主君の恩顧愛たく。
大事の使に立られるまでのるの前ゆれども、刀自の原是誰が妻そともしかけなく
俺親と姉の名さへ知られけん、這地に由縁あるとも母のいかにぞ思ひぞ詳には亦あれと
問ひされてもとも泣く、母子が袖の玉あられ砕く斧柄の歎きより、つらく洛華の臉に本の丸

殿ふわるねども名告ることぞ誰が子ぞと知るでありんと愁ふその妹のる親のる嘗ふ就
て恨くらとで哀く形見昔と今ふ繰返さ涙の滝のと切く絶入可歎を見る久
しう為ふ頭を擡げ目を拭ひく噛末松ぬ。あんすの母れのつぶうくを告も知らさそ
過さて。子得ふ忌むようあれがるけん名告るも面るを見ぶ。吾倅いんすけ爺々八公の
前妻乙柚とりひい女児の甘酒名小夏ふ生の母えう言可惜くも嘗へんすの爺々
公木偶ぬ。都やうひの折々ふこの比那首ふ時ぬく歌妓阿夏とのふあひそを世渡
る業もるひつ。足ゆもつ。心うち。ちとのち崩と銭帛ぬ。貧の水と年あ。使ひ
涸しつ故御ある京ふも残るハ借財のを。債のるふ家をも庫をも人ふ取らまく神
風の五十瀬ふ住むようなくるくれが妻子従類四落八散ふるり時の悲さとさそ
と想像らるへ切て乙柚とこう留めく親里へ行くやくんと見ひ。ふも世ふ物固た元爺
七のうち腹立く妻の子とふとも父ふ隷て憂目をさそ。ひあるよ。咱意ふ違ハぬ

女弟ふあるぬとひかきれしふ力及ぶ年ゆとろうふ四五才る。獨女を色男狂夫ふ貪々ふ
遮与して身ハ殷蝉の営衣脱げと蒼里へひとり帰る浮世の秋の別れ悲く
るるとり。泣あるへいりぬられ尼ふるんと願ひを。それ生ろ兄のえさび。漁火ぜ夜の
歌舟子ゆるの聞を照らぬとるがもあるぬふ京師の便ら嘗く毎ふ木偶ぬ
しる河夏とのとひろふとなえ日ゆあり又その後ハ阿夏とのふ男児を生せるも乙
柚と河原へ行ふ見く。舞踏しつ生活の便者ゆせられとまでも。ある人ゆそ口ろく。都
ゆりの鬼衣貝ふ告られ時ハ鉈まく又哀しちも弥倍と。一日も胃ハ安らぶ。不便や
乙柚ハ五六才ようる。河原挣ろの疲労足跌輾びく怪我せぬ。継母るぬふ幼稚と
女見よ挣ろせもせど出ゆもせど親ぶひも見る父親のさまるよ。恥をあるぬとるハとのうゆ。
泣顔隠さ兄嫂ふ仇意をて送る見。ろとを。這親里へ行くれよろ呉竹の四と
せふるー秋の比木偶ぬ妻子を携乙鎌倉へと起ゆ見と。後ハ哽ふ

人しなければ鶏が鳴く東路遠く想像る身の憂なるの数そひて兄斧七ゆも嫂ゆるを死
別れより生別れなる乙柚とおのゝ暇もあらざ這家のゝ斧柄のゝ只ひとりに兼
持て守む姪ゆ母とし呼れ親と稱へく護養へバ涙も莫なく孝行なる恩愛情義
面るが送ふ隔あるなく哺子を捨て兄の子を子とせしも是過世の業因約束なるを
ありけんと思ひとりて憂ゆりし十年忘れて年を歴しものを昨夕斧柄が禍鬼ふ呼出されし
必死の厄と極りし人いかなる故のまたの児なると知るべきもなきとまうすに木偶なるも。
乙柚の小夏もおなじ山路ふ死天の旅路に返らぬ人の数ふ入りしやあわせ十あまり七歳とふ
けふ露の命も知らで今ゆかく哀傷悲愁草葉の末ふ置く虫ふ涙なくとも思ふ所て子ゆ家ふ
泣叔母のあわれや良しかなると声をそく泣沈ミてる娘捨の月なくなく慰め難し斧柄も
倶ふ泣声立て幼稚なる比を綿摘ミも一番夜寐すがらの目覚し草ふ母さまの説
示さをあひし乙柚とこめの名へしゆ痛ましと思ひし骨肉の姉品年ゆ闌るも環會ふとても

わふんとおもろでハ果敢なきをたのしミに倹ゆひ入もあきて異母なる。そこ含見ゆかへあふかし消
ぬし人の身の花七歳八才を一期としけん投る命ハ浪速江の短き蘆の如しあの怨逢ざりし
しとうらやましのゆふまとひ誰が名つけりんゆしも往方ハ磨針のいともたるる叔母まさゞ気
名ゆ嘆しも後々ふ悔む兄とぞそれもまるる死神の外言欲せ兄れがくる死ハ哀別離苦世に
死生の海なき人の心に風波の起こともなくぐるまでも長閑なるんを形なきの歎をほなく欲
びの寡かりしとおのふ恩痴を併べる死口説く少女まくろも哀れも言果し哀なる死母
子の悲泣を米之介は慰めるも且羞そ頭を低黙然たる事平胸むるの叉きむ胸ふ手を
釋きく落葉母子よ對ひそらふむけいめぐ持てる刀自の本末由縁の端に連りき。
這身ふなりても面目なし怨ハ其の子とし親を識るふ似たれども亡父木偶以の放蕩
無頼の論ざるゆも足らずなる総心もとの惑ひより産を破り妻子を離別し後妻ふ
口を餬やく恥とも世ぞしれ朽そくも赤歎くべきとふなれ小生不才なれども今なをあらん

身親子の興ふ力と竭し骨を折く年来抱せたる俺親の不誼薄情に贖んとて孝行の義倘後ろまぐ拵言に背くことあらば死して必地獄に墮んさのみなる怨みのひそと世ふ頼し紀言葉木の露ふ濡せし神を又絞る落葉の涙と掻拂ひ焼

老人の誠心や淡き老婦の悲をふ勝れば乞あれ思病ものひけめいろでらん身を疎む

べし過去やとしも皆是夢の浮世ふ伝れば好も与紀五十年誰うひとり残らん

況非命ふ世を去りのひし木偶仏やとこ惜とひて亡れ怨こつせ然れば人身の

母はと雪え河夏とのこ天憎とふ神うけく当ひ伝ねば白い哀し紀小夏とこ名つけ

なるひ神がるのこそとあくも這世ぶあよりも亡女兒の興ふ笠折屈む紀ふ人ふ

あひ切ての数の中れ数ひ既ふ斧柄が必死の所を拯ひ恩義を忘ひ神所為

なるぶ奇縁ふ伝る這一夜のとおんなの貧々公の舊術心を神ひ為ふ足るべく伝れども

ひと美し紀心操ふ愛て願ひとなり斧柄が心ふ考ひねる且試ふ内ふ出さんあん身

斧柄を妻とし杣木末松両家の迹を子孫ふ嗣ぬべく木偶仏やと縁ふ絶てる

二ひび夫ふ見えげる五吾侑が貞操も届くべく親と兄との祀も絶ぎられ優ふ絞びあ

らんとさぶれ斧柄を武蔵ふ送遣ひとべんふ願ひうゆとふ考んあん身ふの地ふ這留の

程且婚姻を整べ扶斧柄ふ留ふ功成名遂ふく仕を致しふの地ふ老を頤ひぬべ夫

婦全要る日あらずや一日半夕の添臥ひ老も子を産むあのあ生涯枕を並べても子の

亡ぶが世ふヨメうれば子のあらずひ人力の及ぶべうもなく人後ふ

あるふ東西妹山伏山と別ひとる迷ふ心乗ぶいとや吉野も武蔵野の田面の里と

憑ひく雁の翅ふ暢る書簡の便をも疎うぶ人後樂ひりぬべ斧柄ふ古狐いふ

そやと問れてのとぶ応難ひ苦ふ屈くふ当ひ返ふ潜音ふ

物の本も女のうへ人ふ二従とやらんふ幼ひ亡ふ父母ふ後ふ成長りくる

良人ふ後ふ老てふその子ふ後ふ亡ぶ

侍らん。左も右も莫いそなとゝへば落葉の笑ひ。朱之介もこれに目今なれ
ば。斧柄長く願ふ弁一の議を兼引ゆゑと當面の妹伏の縁譚朱之介の
含笑ふ。ゆゑも勝を找めくそ有ぐこれまで辱すれ商量ゆゑども當さぐこれ上ふ。
向ふも既ふ。ひけ〳〵初て親の非を知りそこの徳を賢んと思ひ起したりけるゆゑ。母子れ
與ふらんやゆゑの中水の底ふ入るとも辞ふぐこれ。今愛そこ其
妻せんとある意外の幸ひ身を終る。まの敷ひ扇谷の昨今の主君ふ。譜第るうねが久
後とも憑〳〵ふ。一両年扈従もとも用ひられず退隠し。力自ふ孝養を尽べ
豈五斗米の為ふ腰を折めて馬前の塵を挿んやこの義もれ。ふ。と悍く男る當
座の応ふ落葉ひらく望足りそ且感て且歎ひそれ。ひそ咱婚ふ。熟譚ふ及ひ。
媒妁ふ。ゆゑ。ひ。什麼誰ふ。ふ。願ふ。此歎彼歎と母親女兒潛ひ。ゆゑ時相譚
折ふ。思ひ。ふ。次房ゆゑ。ひの程ゆゑ人ゆゑそこの媒妁ふ在下ひ必ふ。ふ。任用ゆ

ひとゝ。隔意ふ。と。ひそ左右。颯と推開ひ。落葉斧柄。朱之介。吐嗟。駭
く。但見れ。別人。安保筑前五郎直彩。登時筑前五郎。且席末ふ找入そ。
と。客ふ。報ふ。向ふ在下ふ宿所ふ。退ひ。昏膳。出ふ。次房。伺候せ
折主客の閑談細ふ。愁歎の声。ゆゑ。序次。猜。仂く。找。入。
ひとゝ那首ふ躊躇て。思ひ時。移ひ。
一五一十。事の情。扱ふ。塔君。鎌倉管領の御内人。
當家。亦曾祖の時。越智殿の家臣。甲斐野人。媒妁ふ。
ん。在ひ。不似。亦是武家の退糧人。鷹捉山。誘引。縁。
ひ。れ。彼。の。良。の。代。柯。の。咱。誰。故。礼。
推。團坐。入。義。礼。辯舌。水。流。如。鼻。蟲。説。
落葉。母子。朱之介。感嘆。筑前五郎。血。

出像第廿八
上市乃荘舎ハ落葉
朱之介平魯待き
落葉
斧柄
朱之介
魯五郎

媒妁をたのむよしも又朱之介が親木偶なるものゝ身ハなきにもあらず皆捨て人なるがゆゑのみぞ。
十分その口を鉗て前五郎ハ恙く領ひきて今に養念しぬ今在下も是武士の人なるものせぞ。
妙ならぬことありて誰かれの好きハ急げと俗もいへバ且明後の吉日を擇みて婚
姻を整へ神無月ハ忌ものといへれども僻言ぞ十月ハ陽月とて唐山秦の始皇の時に正
月とせし例もあるべし但可愛ハ折にこそ然ハいふもさてらにある執持たる落葉ハ更に異議もなく
又朱之介にうち對ひて汝ハ今より這裡に居まして如如来さるの帰庵の日を俟あへず
便宜に待らん然らバ那人布施物も客店に措いて要あらし這裡ハ倉庫も二座ありけれバ
なんぢと共に出よりぬ從者達ハ左も右もなんぢの随意なるへしとのたまふを朱之介いちはやく
その意義も尊む從ふべし那両個の從者ハ別に遣ふ所ありとてそれがし刀をもたせて白金の
割掃枝と吊るし茶筅を與へくるゝ一人をも扇もうち載せ前五郎にうち對ひ喃
阿㳒人這茶筅ハ原裏に河蹄を首途に折主君より賜ひし又掃枝ハその己前叔父の

類ひなるものなれバ旅ゆくことハあれバ納采に進らすべき東西もなし因て這二種を朱陳の徴に見
られんことを冀ふ所なりとてやがて傳へぬるを受とりて遮与と前五郎ハ恭しく受とりつゝ左見
右見るうち咲ましく這茶筅ハ竹林に群雀の描書あり又掃枝ハ童子花菱の鏤彫
あり割掃枝ハ陽陰一對又茶筅ハ偕老の仙丹とぞ籠られけん千歳の吉兆當意
即妙なぞ受收めぬるぞ祝して斧柄にかけ遣るもそれが落葉も倶に歡びぬ述て媒妁を
労ひけり斯て大盃を巡らしつ旦飯を差出しける管待日の闌しかバ朱之介ハ旅亭に
還りて翌又来るべしと別を告るに落葉斧柄ハその意に任して躬ら盃を納めけり
嗚呼縁なれバ千里も合壁縁なきときハ肝膽も胡越究竟家に還る壻と成り姑と嫁と婦
となるそれ是天縁ぞ人欲月下翁の衒ふ欲実にあらず情縁之案下某生再説朱之
介の從者坊三郎と鷹捉山ぞおるわれも朱之介に追後れて索ぬとびて麓に下り了ぬ日を
暮るるまで俟しかど敢てくる事もなかりしが原来是は別路より六田へ赴く邦のひかけんと

ひとつごち路次を急ぎぞ。その夜更闌一比六男の旅亭ふ立入りて乃介ふ回へ朱之介。いまぞ還らぎとの示復訪りて追後れるよりを報知せ。せち相譚へども小夜深されば
けらふ又那山へ向ぐもめぞ胸安ぐねどその夜い就枕く。明朝又旅亭を立出ひとり
鷹捉山ふ赴紀く。朱之介を尋ぐ。鈍や深くらけ陟らぞ朱之介い既ふ名箭五
郎们と共侶ふ上市へを別路より山を下て後れ。竟ふ復尋ぐも遭ぬ。ひ少く訝り
まぐ憂ひく困び果ぐ六男ふ向てそ。とりを乃介ふ報ぐ。乃介も倶ふ疑念起てさく両人
額を病ぐ。評議を凝せぞ下司の智計。果ぐ多間ふ冬の日の景い短くけふも亦下
晡まるふけり。浩処ふ朱之介上市の郷より帰来ふけれ。坊二郎い乃介と倶ふ慌迷
ひ迎へく。昨夕よりけふまでも索ひびる縛の趣箇様々々と且報て悉ぐ祝ぐ。
ぬのうへを又問ま朱之介いち笑ひ且茶を喫を衣裳を脱更て扨昨夕鷹捉山を
魔を追走ぐと路ふ迷ひぜん術をふ露宿とて。料らぞも那山ゆ二隻の山猿を射

殺て。斧柄を拯て為体を首より尾まで今現るごく説示せば乃介坊二の舌を巻て。
或い怕と或い怒ぐ。の射術ふ捉れを只管是ぎ已ざりけれ。朱之介いぐ笑ぞこれい
いまぞ奇とぞふ足らぞ。不思議の事ふあるるめ。昨夜俺拯いる。斧柄の母親ぐ為ふ
父ぐこの叔母ぐ元仙を時相別れ。迭ふ来ぐあをけるふ必ぞ環會ひ。叔母の
歓び大ぐ喜ぞ習。より那家を旅亭ふ。禪師の帰菴を等とのふ俺ふふ禪師れ
帰菴ふ。まぞ且く程あん俺い那韓樞を運移さて。叔母の居宅ふ宿りを
賛べ。ぐ。ん由い汝達の是首ふ在らんい徒然ぐ。所詮今爰の暫く比ぐ京
まれ浪速まれ赴紀。佳宿微く遊びて来よ盤纏いれのの甘ぞとの由斧柄と婚
姻を考せ。とふ胸臆伎倆とふ考ぐ。扨乃介坊二一議ふ及ぞ領諾て。そを情
あるあん計いと泰ぞ。とふん然らば且韓樞を叔母御前の宿所へ遣て。俺們の愛時
暇をぬり。南都ぞ吉野の峰吉野いぐ竹都の伊勢泰宮京浪速を悉偏歴ぐ。

年極の比は必ずまあいんとあ義を允し一ぬ。とふ朱之介は領ぜくそ各の随意事べ。翌上市るる抱母の宿所へ韓樞を遣さゆ。別ふ人を傭んも汝達は翌朝あるる

とあく発足せと且盤纏ちまこもべ。とれりて内ぢれと行嚢とる。金壱両ら数出ら分ちく

二人ふ与へ〻ぐ乃介坊二ふ受戴して旅ぶと大くるるもその詰朝朱之介ふ恩を謝し別

れを告て旅亭を出てゆけり。この日亭午の比及ふ安保箭五郎は旅亭ふ来て朱之介ふ

対面し且婚縁熟譚の旅ぶを述来由を告げ〻ば黄道吉日るれば今宵婚姻ふ

ぶし。と落葉の刀自のいるるに有徒が和君の行李をも送るく上市へ運移し〻那裡へ赴

ぬ〻。とふ朱之介は異説もるく二個の従者を出し遣らる。綷の翅を告ぬ韓樞と

早く人足を傭んと相譚ふ箭五郎はるる旅亭主人ふよりしとふ〻七猛ふ四下の

荘客を傭ふく韓樞を早しけり然程ふ朱之介は旅亭主人ふ坐席を返し且ぶれ

房銭を取せるどう箭五郎と共侶ふ韓樞と先ふ早しく杣木の落葉が宿所ふ

来ふけり。これを認る里人们は那韓樞を増の衣裳と調度ちゅうんと思ひけり。ゆきて落

葉はあの旦開よりよろづの儲ふ暇るく。斧柄ふ結髪化粧をはーく。准備ゆう孤〻

整ふ比氷人安保箭五郎ふ倶せられく朱之介の来ふけれ且二箇の韓樞な庫

中ふ扛納さて傭人足们を返し遣し。扨朱之介は儲の席ふ著しめく。箭五郎ふも

茶を著て旅ぶを述るる忙しきふぶうもあるを左右ある程ふ日の暮しふ燭臺

三本ふ措並べ斧柄と席ふ著しめく。朱之介と婚姻の盃を執結さるふ氷人箭

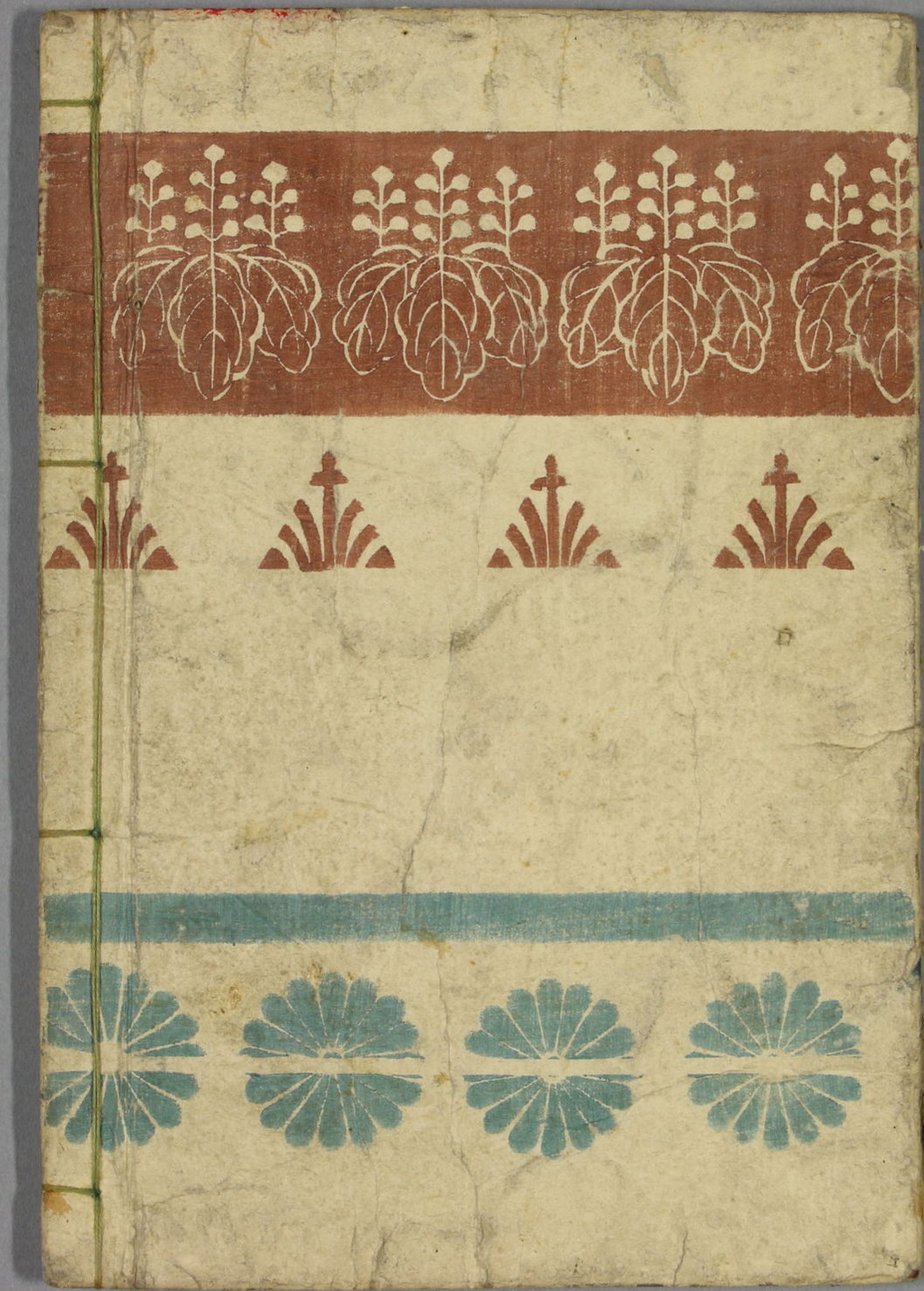
五郎が妻ふ向ける。奥るい午の比ろ来て良人と倶ふ這婚姻の席ふ列て執持て

千秋万歳とを壽ける。綷不用意ふ出し婚席を素ろ田舎のるるれい華やう

るる儲るとのくども美女美少年一對ふ洞房花燭も光を増ん錦の上ふ花を

添る。夫妻ふてせと批評し。嘆賞せざるはるアーを恨る所ろ心ざるふ美悪賢不

肖その差ありて。對きべくもわらぶとる。今このとふ者ろ一ろけれが偽ぢくのの愛ろ必

丁寧に皆三次へ送りぬるに。やがて落葉の次の日ふ餅を四鄰の里人と笛五郎が宿所
餽遣しを。其日斧柄とわかくがへられ報ひとして且招婿のことを告て稍宿念を果
けり是よりして朱之介を。杣木の宿ふ起臥して。ものを日を弥ふ夫婦睦
しかりぬふあれど斧柄いよいよ折目正しく浮たる工ふ露なりもの紀を失之介い
なりひしかも似ぜ洞房の間ふを。趣ることを憾とせり況落葉ふ朱之介を。愛寵
客のごとくふしく。尚且ふもうちこけく要ることのふかのいらぬ。然ばとく疎くもせぬ
斧柄が心つけるをこそ陰ふ立ち並ぶ諭しく。何事も朱之介ふ不自由ふしせとそ
機をつくれとも朱之介い大く困じく。繭緒く頭を絞らをとふ世の鄙語ふ似ぬ
心地しい時々支ふ假托て笛五郎許赴をうち譚ふとせあての保糧ることを長入り畢竟
朱之介が笛五郎と友と七又甚麽ることを説話ふあるを次の巻ふ解分ることを聽給へ。

近世説美少年録第五輯巻之一終